

キャサリン・マンズフィールド作

桃山まや訳

ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

『ドイツの保養所にて』には全部で十三の作品が収められています。そのうちの七編は、保養所を舞台にドイツ人たちの俗物ぶりを辛らつに描いたものですが、残りの六編はすべて独立した短編小説になっています。今回お届けする第五話は、そのうちの二つで、この作品集の中でもマンズフィールドの人生観をとてもよくあらわしている作品だといえます。

第五話 ブレックヘンマツヘル氏の奥さん結婚式に行く

支度するのはほんとうに大変だった。夕食が済むと、ブレックヘンマツヘル氏の奥さんは、五人いる子供のうち四人をベッドの中に押し込んだ。ローザを起こしておいたのは、ブレックヘンマツヘル氏の制服のボタン磨きを手伝わせるためだった。そして夫の一番上等のワイシャツにアイロンをかけ、長靴を磨き、黒いサテンのネクタイをつくろった。

「ローザ」奥さんが呼んだ。「わたしのドレスをここにもってきてきてストープの前に掛けてくれない。しわを伸ばさないといけないから。いいわね、みんなのこと頼んだわよ。おまえも八時半になったら必ず寝るのよ。それからランプには絶対にさわらないことさわったらどうなるか、わかってるわね」

「分かっているわ、ママ」ローザはそう答えた。けれど、わたしだってもう九つよ、ランプくらいいくつあったって一人前に扱えるわよ、と言いたい気分だった。「でも、もう少し遅くまで起きていてもいいでしょ」赤ちゃん』が目を覚ましてミルクをほしがるかもしれないし」

「八時半と言ったでしょ！」奥さんが言った。「わからないなら、お父さんからも言うてもらいますよ」

ローザは口をへんの字に曲げた。

「だって…だって…」

「ほら、お父さんのお帰りよ。寝室に行ってわたしの青いシルクのスカーフを取ってきてちょうだい。おまえにはこの黒いシヨールをかき上げてあげるから」ほらー」

ローザは母親の肩からショールを引きずりおろし、結び目が背中に来るように注意深く身体に巻きつけた。八時半に寝るにしても、それまではげつたいにショールをかけていよう。そう決めたことで気持ちがすっきりおさまった。

「さてと、俺の服はどこだい？」ブレッケンマツヘル氏が大声をあげた。空になった集配袋をドアの内側に向け、足をとんとん踏み鳴らしながらブーツの雪を払っている。

「どうせなんの仕度もできちゃいないんだろう。みんな集まってる時分だっていつの間に前を通ったらバンドの演奏だって始まってたぞ。なんだ、まだ着替えてもいないのか。そんな恰好で出かけられると思ってるのか」

「ほら、ここ」あなたのはみんなテーブルの上に用意してありますよ。それから洗面器のなかにお湯をいれておきましたから顔を洗ってください。ローザ、お父さんにタオルを。ほかの仕度はすっかりできていますけどね、ズボンだけがどうしても間に合わなかったの。裾をつめる暇がなくて。わるいけど、向こうに着くまで裾はブーツの中に入れておいてくださいな」

「まったく」ブレッケンマツヘル氏が言った。「ここ狭くちや動けやしない。こっちは明かりがなくちゃ無理だ、おまえは廊下で着替えてくれよ」

奥さんにとっては暗がりで着替えることなどなんでもなかった。スカートとボディスのフックをかけ、スカーフを首に巻いてフローチで留めれば出来上がりだ。フローチにはマリア様と四つのメダルがぶらさがっていた。そして奥さんはマントをはおり、フールドをかぶった。

「おい、バックルを止めてくれないか」ブレッケンマツヘル氏が奥さんと呼んだ。彼ははあはあ喘ぎながら台所に立っていた。青い制服のボタンがひときわ輝いて見える。それは制服のボタンだけに許された特別な輝きのようだった。

「どうだい？」

「とても立派よ、あなた」奥さんはバックルをぎゅっと締め、上着のあちこちを少しずつ引っ張った。「ローザ、おまえもここに来てお父さんを見てもらえ」

ブレッケンマツヘル氏は台所をゆっくりと行ったり来たりしてから、コートをかけてもらい、奥さんがランタンに灯を入れるのを待った。

「よし！さあ、出かけよう」

「ローザ、ランプのことわかってるわね」奥さんはその念を押してドアを閉めた。

その日は一日中雪が降らなかった。凍てついた道は氷の張った池のようにつるつるしている。久しぶりの外出だったし、朝から目が回るほど忙しかったので、奥さんの頭はぼーっとしてうまく働かなかった。ローザには家から追い出されたような気がするし、夫は自分を置いてどんどん遠ざかっていくように見えた。

「待って、ねえ、待ってください！」奥さんは夫を呼んだ。

「もたもたするなよ、足が濡れちまうじゃないか」

村にはいると歩くのがいくらか楽になった。柵があったのでつかまることができたし、

駅から先は会場のレストランまで、石炭殻をまいた小道が続いていた。

レストランはお祭り気分に浮かれていた。窓という窓から明かりがこぼれ、樅の小枝で作ったリースが突き出た窓枠の下にぶら下がっていた。ブレッツヘンマツヘル氏が大枝で飾られた入り口の扉を押し開けると、店の主人がウエイトレスたちをせきたてる声が聞こえた。ビールの注がれたグラス、カップとソーサーをのせた盆、ワインの瓶がひっきりなしに運ばれていく。

「さあさお二階へ　お二階へどうぞー！」店の主人の大声が飛んできた。「コートは踊り場に置いてください」

ブレッツヘンマツヘル氏は店の主人の堂々とした態度にすっかり圧倒されていた。夫としてのたしなみも忘れ、前に出ようとした拍子に奥さんを階段の手すりにぶつけてしまい、許しを請わねばならないありさまだった。

ブレッツヘンマツヘル氏が会場に入ると、同僚たちの間から歓声が上がった。奥さんはブローチの向きを直し、両手を重ね、郵便局員の妻らしく、そして五人の子供たちの母親らしく毅然としていた。それは美しい会場だった。三つの長机はダンスが踊れるように隅に寄せられ、天井から下がった石油ランプが、造花や花輪で飾られた壁に明るく暖かい光を注いでいた。

正面におかれたテーブルの真ん中に花嫁と花婿が坐っていた。花嫁は縞柄と色地のリボンをあしらった純白のドレスを着ていた。まるで小さく切り分けられて、花婿にさしだされるのを待っているアイスケーキのようだった。花婿は白いだぶだぶのスーツを着ていた。ネクタイがワイシャツの襟から不恰好にはみだしていた。新郎新婦のまわりには、慎重に配慮された席順で親族たちが座っていた。花嫁の右隣には小さな女の子が坐っている。しわのよったモスリンの服を着せられ、片方の耳に忘れな草を挿していた。人々は笑い、しゃべり、握手をし、グラスをならし、床を踏み鳴らした　会場にはビールと汗の臭いが充満していた。

新郎新婦に挨拶をすませ、夫の後について会場を歩きながら、ブレッツヘンマツヘル氏の奥さんは、自分がパーティーを楽しむつもりになっていることに気がついた。久しぶりにかぐ宴会の匂いに身内が熱くなり、ほほが火照るのを感じた。誰かがスカートを引っ張った。振り向くと、ラップ肉屋の奥さんがしきりに椅子を勧めている。

「フリッツがビールを取りに行ったわ」ラップ肉屋の奥さんが言った。「それよりもあなた、スカートの後ろが開いているわよ。歩くたびに隙間からペチコートがちらちらしてるんだもの、悪いけど笑っちゃったわよー」

「あらやだ、どうしましょー！」ブレッツヘンマツヘル氏の奥さんは、崩れるように座り込むと思わず唇をかんだ。

「もうすんだことよ」ラップ肉屋の奥さんが言った。肉づきのいい手をテーブルの上に置き、三つの形見の指輪を嬉しそうに眺めている。「でも、気をつけなくちゃだめよ、特にこういっ席ではね」

「それにしてもなんて結婚式だろうねえ」レダーマン夫人が割り込んできた。レダーマン夫人は、ブレッツヘンマツヘル氏の奥さんをはさんでラップ肉屋の奥さんとは反対側に座っていた。「子供を連れてくるなんて、テレサだったらまったくいい度胸してるわよ。所帯を持ったら二人で暮らすんですってよ。よりにもよって、自分の結婚式に父なし子を連れてくるなんて、教会への冒瀆もいいところよ」

三人は坐ったまま花嫁をにらんだ。花嫁は目だけきよるきよるさせながら、口の端にかすかな微笑を浮かべてじっとしていた。

「ねえ、ちょっと見てくらんなさいよ、あの人たち子供にビールなんか飲ませてるわよ」肉屋の奥さんが言った。「あらあら、白ワインとアイスクリームも。あんなに食べられやしないわよ。まったく子供なんか家においてくりゃいいのにねえ」

ブレッツヘンマツヘル氏の奥さんは花嫁の母親に視線を移した。母親は娘からけつして目を離そうとしなかった。年老いた猿のように茶色い額にしわを寄せ、時おり神妙な面持ちでうなずいている。震える手でジョッキを持ち上げ、飲み終わると床の上につばを吐いた。ドレスの袖で唇をぬぐう姿はまるで野蠻人のようだった。やがて音楽が始まった。母親はその目でテレサの姿を追い続け、ダンスの相手が変わるたびに、不安げなまなざしを向けるのだった。

「ばあさん、元気をださんか」父親が母親のわき腹をつついた。「テレサの葬式じゃあるまいし」父親はそう言って、客に向ってウインクをした。あたりにどっと笑いが起こった。

「あたしや元気ですよ」母親は小声で言った。そして、あたしだって楽しんでますよ、とでも言うように、音楽にあわせて拳でテーブルをたたいた。

「あの人には、テレサのこれまでのため振り忘れられないんだわ」レダーマン夫人が言った。「だいいち自分の結婚式に子供を連れてくるなんて人がどこにいますか？」なんでも日曜日の夜にひと悶着あったらしいの。テレサったら結婚するのはいやだって手がつけれないほどこねたそうよ。しまいには牧師さまを呼びにいったっていう話だもの」

「子供の父親はどこにいるの？」ブレッツヘンマツヘル氏の奥さんが聞いた。「どうして結婚しなかったの？」

レダーマン夫人は肩をすぼめた。

「いなくなっちゃったのよ　消えちゃったの。行商人でね、あの人たちの家に泊まったのだから二晩ほつきりだっていうし。シャツのボタンを売り歩いてる人でね　わたしもいくつか買ったわよ。品物はまずまずだったのに　まったくなんて男だろうねえ！それにしてもあんなみっともない娘のどこがいいのかしら　あばたもえくぼとはよく言ったもんだわ。そつえば、十六歳をさかいに、あの子は火の玉みたいになっちゃまったって母親がこぼしてたわよ」

ブレッツヘンマツヘル氏の奥さんは、ジョッキのビールに目を落とし、息を吹きかけて

泡にちいさな穴を開けた。

「それなら結婚しなければいいのに」「ブレッヘンマツヘル氏の奥さんは言った。「二人を同時に愛するなんて、神様の教えに背くことよ」

「でも、今度の男となら、結構うまくいくんじゃないの」「肉屋の奥さんが憎らしそうに言った。「去年の夏、うちを下宿してたのを追いついてやったのよ。ふた月もおなじ服を着っぱなしだし、部屋が臭うから何とかしてほしいってたのんだら、この臭いは自分のせいじゃない、下の店から臭ってくるんだ、の一点張りなんだもの。まあ、だれと一緒にになったって、女は苦勞するようにはできていないのかもしれないね」

ブレッヘンマツヘル氏の奥さんは、隣のテーブルで同僚たちに囲まれている夫に目をやった。夫が飲みすぎていることはすぐにわかった。大げさな身振りでつばを飛ばしながらしゃべっている。

「ほんと、その通りだわ」「ブレッヘンマツヘル氏の奥さんが言った。「女はそうやって色々なことを覚えていくのね」

太った年配の女性に挟まれていては、ブレッヘンマツヘル氏の奥さんがダンスを申し込まれる見込みはまずないといつてよかった。奥さんは、輪を描きながら目の前を通り過ぎていくカップルたちを眺めていた。五人の子供のことも、夫のことも忘れ、娘のような気分浸っていた。甘く切ない旋律が流れていく。奥さんの荒れた両手が、スカートの襷の下で組まれたりほどけたりしていた。音楽を聴きながら、奥さんはだれの顔も見たくないと思った。ほころんだ唇がかすかに震えていた。

「あらあら」肉屋の奥さんが声を上げた。「あの人たちったら、テレサの子供にソーセージなんかやっつて。あれでおとなしくさせようっていう魂胆ね。そろそろ祝辞が始まるのかしら。お宅のご主人の順番じゃないの」

ブレッヘンマツヘル氏の奥さんはきちんと座りなおした。音楽が止み、カップルたちはめいめいのテーブルに戻っていった。

ブレッヘンマツヘル氏だけが立っていた。その手には銀製の大きなコーヒーパーツトを持っている。祝辞が始まるとみんなが笑った。笑わないのは奥さんだけだった。ブレッヘンマツヘル氏がわざと顔をしかめ、赤ん坊でも抱くような恰好で新郎新婦にコーヒーパーツトを手渡すと会場が笑いどよめいた。

花嫁がポットのふたを開けた。しかし中をのぞきこんだ瞬間アツと言ったきり唇をかんで坐り込んでしまった。花婿がポットをひったくり、中から哺乳瓶と瀬戸物の人形が入った小さなゆりかごを二つ取り出した。花嫁の目の前でゆりかごを揺らすと会場が笑いの渦につつまれた。

ブレッヘンマツヘル氏の奥さんには何がおかしいのかわからなかった。奥さんは笑っている人たちの顔を見回した。すると突然、みんなの顔がまったく知らない人の顔のように見えた。奥さんは家に帰りたいと思った。もう二度と外に出たくないと思った。みんなが自分のことを笑っている、この部屋にいるよりももっとたくさんの方が自分のこ

とを馬鹿にして笑っているような気がした。

ブレッヘルマツヘル氏と奥さんは帰り道を歩いていた。二人は一言も口をきかなかった。ブレッヘンマツヘル氏は大またでずんずん進んで行く。奥さんはよろめきながらその後を追った。駅を過ぎると白いつら寂しい道が続いていた。前から吹いてきた冷たい風が、奥さんのフードを後ろに吹き飛ばした。その時ふいに、奥さんは結婚してはじめて家にやってきた晩のことを思い出した。

今では五人の子供がいる。蓄えも二倍に増えた。でも

「でも、それがなんだっていつの？」奥さんはそつとつぶやいた。家に戻って肉とパンだけのささやかな夜食を作っているあいだも、そのことばかり考えていた。夫はパンで皿のうえをぬぐっては、せわしげげに口に運んでいる。

「おいしい？」テーブルの上に置いた腕に胸からもたれかかるようにして奥さんが聞いた。

「すくくうまいよ」

ブレッヘンマツヘル氏はパンの切れ端で皿のふちをぬぐい、奥さんの口へ持っていた。奥さんは首を振った。

「いらぬわ」

「こつてりした一番うまいとこをやったのに」

ブレッヘンマツヘル氏は皿の上のものをすっかり平らげてしまつと、ブーツを脱いで部屋の隅に放り投げた。

「たいした結婚式じゃなかつたな」彼は足をぴんと伸ばし、分厚い靴下の中でつまさきを動かした。

「そうね」奥さんは脱ぎ捨てられたブーツを拾い、乾かそうとストーブの上に置いた。ブレッヘンマツヘル氏はあくびをしながら大きく伸びをした。奥さんを見上げた顔が笑っている。

「家にはじめてやってきた晩のことを覚えているかい？ あの頃のおまえはほんとうに初心だったよな」

「馬鹿なこといわないでください。そんな昔のこと覚えてはいるわけがないでしょ」けれど奥さんはちゃんと覚えていた。

「俺の耳を殴ったじゃないか……じきにおとなしくなったがな」

「いい加減にしてください！ ビールの飲みすぎじゃありませんか。もう寝たほうがいいわ」

ブレッヘンマツヘル氏は椅子の背にもたれてくすくす笑った。

「あの晩はそんなこと言わなかつたぞ。それにしても、ずいぶんてこずらせてくれたよな！」

けれど、奥さんはロウソクを持って隣の部屋へ行ってしまった。子供たちはぐっすり

眠っていた。赤ん坊のオムツをはずし、濡れていないことを確かめると、奥さんはブラウスとスカートを脱ぎはじめた。

「いつだって同じ」奥さんは言った。「世の中なんていつだって同じなんだわ。なんて、なんてばかっているのかしら」

結婚式の記憶さえすっかり色あせていた。奥さんはベッドに横になった。夫がよろめきながら入ってくると、傷つけられるのを恐れる小娘のように腕で顔を覆った。